

# 館蔵資料よりみた程遠岑作品について

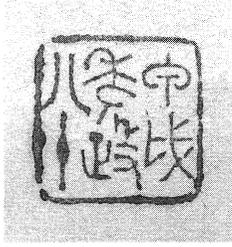
瀬川敬也

はじめに

本稿では、公益財団法人日本習字教育財団観峰館（以下、観峰館とする）収蔵資料中より二九件の程遠岑の作品を取り上げ、人物の履歴とその作品について初歩的考察を加える。本稿で程遠岑を対象に選択した理由は、近年、観峰館および他館での企画展に出陳する機会があり<sup>①</sup>、さらに東京大学東洋文化研究所東アジア美術研究室による画像資料収集の対象に選定されたことにより、一応の情報を整理する必要があると感じたためである。しかしながら、清末から民国初期にかけての揚州画壇において一定の知名度を有していたと思われる<sup>②</sup>にもかかわらず、日本においてはもちろん、中国においてもその紹介を目にする<sup>③</sup>ことがほとんどないのが現状である。そこで本稿では、まず程遠岑の通説的履歴を紹介し、館蔵資料から得られる制作年代や年齢、印や文字の情報を整理するとともに、程遠岑作品の基本的特徴を考察し、あわせ個別の作品から人物関係などの背景情報を探ってみたい。なお本稿においては行論の便宜に合わせて各作品に作品番号を付し、作品タイトルとともに標記した【表1参照】。

## 一、生年と制作年代について

まず程遠岑の履歴であるが、管見の及ぶ限り、顧一平「《九老図》与《九老歌》」<sup>③</sup>に引かれるものが比較的くわしい。以下要約する。



【図版1】  
「甲戌年政八十」朱文方印

ところで、制作年代および年齢を導き出す場合、生年が基準になるわけであるが、履歴に挙げられている咸豊五年（一八五五）が正確なのか、今のところその出典が不明なため文献資料による裏づけがとれない。ただ幸いなことに、館蔵資料の⑱「寿山福海図」に「甲戌年政八十」【図版1】という朱文方印が鈴せられている。甲戌の年は民国二十三年（一九三四）にあたるため、この年数えて八〇歳とすれば、咸豊五年（一八五五）生まれで矛盾がないことが一応確認できよう。<sup>⑦</sup>

館蔵資料のうち、制作年がわかる最も古いものは、①「携琴訪友図」の「庚申夏四月」、②「梅花高士図」の「庚

作品番号	資料番号	タイトル	作品概要	法量 (縦×横/cm)
①	5b-6475	携琴訪友図	紙本設色山水図	136.3×33.5
②	5b-5451	梅花高士図	絹本設色山水図	50.8×34.8
③	t-0824-1	山水図斗方	紙本設色山水図	22.7×55.4
④	5b-8711	梅花書屋図	紙本設色山水図	141.5×35.0
⑤	5b-7207	歳朝清供图	紙本設色器物図	95.0×37.5
⑥	5b-6317	墨梅図	紙本水墨梅図	132.3×21.7
⑦	4a-0124	猗香亭図	紙本設色山水図	63.6×111.0
⑧	5b-8712	桃実図	紙本設色桃図	170.0×37.3
⑨	5b-6439	溪山訪友図	紙本設色山水図	135.5×72.5
⑩	5b-4743	溪山霽雪図	紙本設色山水図	136.0×33.5
⑪	3F-0131-2	山水図扇面	紙本設色山水図	19.3×54.2
⑫	3F-0132-1	山水図扇面	紙本設色山水図	17.4×50.3
⑬	5h-0167	採芝図	紙本設色山水図	137.1×67.3
⑭	5b-6685	溪山論古図	紙本設色山水図	72.3×39.5
⑮	5b-8710	西池桃熟図	紙本設色桃図	132.5×34.5
⑯	5a-0113	桃実図	紙本設色桃図	76.6×37.5
⑰	5b-4369	孤山高士図	紙本設色山水図	102.3×31.8
⑱	4a-1611	寿山福海図	紙本設色山水図	133.2×62.3
⑲	5b-6832	暁風残月図	紙本設色山水図	61.0×33.2
⑳	5b-6548	夏景山水図	紙本設色山水図	67.6×34.0
㉑	5a-3609	夏景山水図	紙本設色山水図	136.2×33.6
㉒	5b-7312	花卉博古図	紙本設色器物図	136.2×22.2
㉓	5b-6192	梅花高士図	紙本設色山水図	72.0×33.3
㉔	5b-7635	墨梅図	紙本水墨梅図	132.1×20.3
㉕	5b-4943	雲峰飛瀑図	紙本水墨山水図	131.8×33.0
㉖	t-0197-1	山水図斗方	紙本設色山水図	31.2×37.7
㉗	5b-6206	寒林雪霽図	紙本設色山水図	147.7×39.0
㉘	5b-7632	山水図	紙本水墨山水図	81.0×36.4
㉙	5b-8709	山水図	紙本設色山水図	140.8×36.3

【表1】作品一覧表

程遠岑は名を諍といい、字の遠岑で通った。咸豊五年（一八五五）生まれ。原籍は安徽歙県で、祖父の代より揚州に移り住み、淮南・淮北の塩場で塩取引の監督に従事した。幼い頃から学問を好み、絵画を愛好した。揚州に寓居していた蓮溪に師事し、山水画を得意とした。清末から民国初の揚州画壇では、「専工山水」の画家として第一に挙げられる存在であった。<sup>⑤</sup> 民国三〇年（一九四一）六月五日病逝。享年八七歳。

程遠岑の生卒年（一八五五―一九四一）は、他所において触れられる履歴でも一致しており、<sup>⑥</sup> おおむね定説として受け入れられていることがうかがえる。そこで館蔵資料のうちから紀年のある作品を抽出し、程遠岑の履歴に照らし合わせて制作年代と年齢を確認してみる。

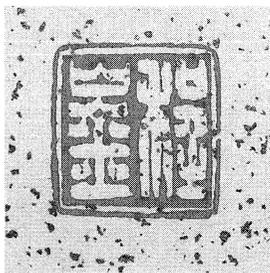
作品番号	資料番号	タイトル	干支	制作年	西暦	年齢
①	5b-6475	携琴訪友図	庚申夏四月	民国9	1920	66歳
②	5b-5451	梅花高士図	庚申秋日	民国9	1920	66歳
③	t-0824-1	山水図斗方	庚申秋日	民国9	1920	66歳
④	5b-8711	梅花書屋図	辛酉冬日	民国10	1921	67歳
⑤	5b-7207	歳朝清供图	癸亥春日	民国12	1923	69歳
⑥	5b-6317	墨梅図	癸亥春日	民国12	1923	69歳
⑦	4a-0124	猗香亭図	乙丑夏四月	民国14	1925	71歳
⑧	5b-8712	桃実図				※「古希」
⑨	5b-6439	溪山訪友図	丙寅冬	民国15	1926	72歳
⑩	5b-4743	溪山霽雪図	丁卯冬	民国16	1927	73歳
⑪	3F-0131-2	山水図扇面	戊辰夏六月	民国17	1928	74歳
⑫	3F-0132-1	山水図扇面	戊辰夏	民国17	1928	74歳
⑬	5h-0167	採芝図	戊辰冬日	民国17	1928	74歳
⑭	5b-6685	溪山論古図	辛未秋七月	民国20	1931	77歳
⑮	5b-8710	西池桃熟図	癸酉夏日	民国22	1933	79歳
⑯	5a-0113	桃実図	丁丑	民国26	1937	※「時年八十三」
⑰	5b-4369	孤山高士図	丁丑秋日	民国26	1937	83歳
⑱	4a-1611	寿山福海図	戊寅夏六月小暑後八日	民国27	1938	84歳

【表2】制作年代・年齢一覧表

申秋日」、③「山水図斗方」の「庚申秋日」で、いずれも民国九年（一九二〇）にあたるため、数え（以下同じ）六六歳の作となる。以下順を追っていくと【表2参照】、④「梅花書屋図」の「辛酉冬日」が民国一〇年（一九

二一）で六七歳。⑤「歳朝清供图」の「癸亥春日」、⑥「墨梅図」の「癸亥春日」が民国一二年（一九二三）で六九歳。⑦「猗香亭図」の「乙丑夏四月」が民国一四年（一九二五）で七一歳。⑨「溪山訪友図」の「丙寅冬」が民国一五年（一九二六）で七二歳。⑩「溪山霽雪図」の「丁卯冬」が民国一六年（一九二七）で七三歳。⑪「山水図扇面」の「戊辰夏六月」、⑫「山水図扇面」の「戊辰夏」、⑬「採芝図」の「戊辰冬日」が民国一七年（一九二八）で七四歳。⑭「溪山論古図」の「辛未秋七月」が民国二〇年（一九三一）で七七歳。⑮「西池桃熟図」の「癸酉夏日」が民国二二年（一九三三）で七九歳。⑰「孤山高士図」の「丁丑秋日」が民国二六年（一九三七）で八三歳。⑱「寿山福海図」の「戊寅夏六月小暑後八日」が民国二七（一九三八）で八四歳である。また、⑯「桃実図」には紀年はないものの、「時年八十三」とあることから、民国二六年（一九三七）の作であることが分かり、⑧「桃実図」には紀年・年齢ともないが、⑦「猗香亭図」と同じ⑱「古希」朱文楮円印【図版10】が鈴せられている（後述）ことから、ほぼ同時期の作であると判断できる。

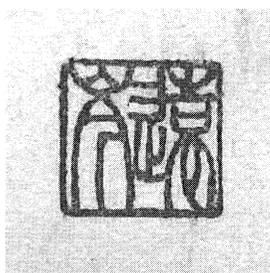
以上、制作時期が判明した館蔵資料に関していえば、すべて通説の生卒年と矛盾するものではなく、六六歳から八四歳までの作品がかなり網羅されているといえる。



【図版7】㉖「程峯」白文方印



【図版2】①「程峯」白文方印



【図版8】㉖「遠岑」朱文方印



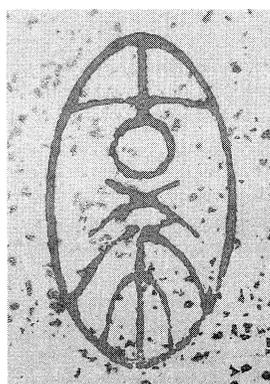
【図版3】⑩「遠岑」朱文方印



【図版9】㉖「程峯書畫」白文長方印



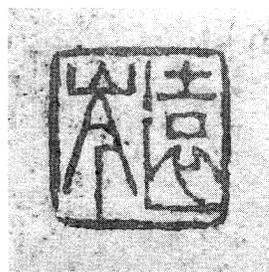
【図版4】㉖「硯印」朱文長方印



【図版10】㉖「古希」朱文橢円印



【図版5】㉖「程峯私印」白文方印



【図版6】㉖「遠岑」朱文方印

## 二、使用印章について

次に、作品上の用印に関して考察する。程遠岑の自用印章は、館蔵資料から二六種類の印影が確認できる。このうち複数の作品にわたって使用されているものを抽出すると【表3参照】、②「梅花高士図」と⑱「曉風残月図」の①「程峯」白文方印【図版2】、②「梅花高士図」と⑪「山水図扇面」、⑫「山水図扇面」の⑩「遠岑」朱文方印【図版3】、③「山水図斗方」と⑳「夏景山水図」の④「硯印」朱文長方印【図版4】、⑦「猗香亭図」と⑯「桃実図」および⑳「墨梅図」の⑤「程峯私印」白文方印【図版5】と⑦「遠岑」朱文方印【図版6】の組み合わせ、⑧「桃実図」と⑮「西池桃熟図」の⑥「程峯」白文方印【図版7】、⑭「溪山論古図」と⑳「花卉博古図」の⑦「遠

印番号	印文	法量 (縦×横/cm)	作品 番号	資料番号	タイトル
①	程峯 (白文方印)	0.8×0.7	②	5b-5451	梅花高士図
			⑱	5b-6832	曉風残月図
②	遠岑 (朱文方印)	0.9×0.9	②	5b-5451	梅花高士図
			⑪	3F-0131-2	山水図扇面
			⑫	3F-0132-1	山水図扇面
③	稔印 (朱文長方印)	1.1×0.8	③	t-0824-1	山水図斗方
			⑳	5b-6548	夏景山水図
④	程峯私印 (白文方印)	1.2×1.2	⑦	4a-0124	猗香亭図
			⑯	5a-0113	桃実図
			⑳	5b-7635	墨梅図
⑤	遠岑 (朱文方印)	1.2×1.2	⑦	4a-0124	猗香亭図
			⑯	5a-0113	桃実図
			⑳	5b-7635	墨梅図
⑥	程峯 (白文方印)	1.6×1.5	⑧	5b-8712	桃実図
			⑮	5b-8710	西池桃熟図
⑦	遠岑 (朱文方印)	1.0×1.0	⑭	5b-6685	溪山論古図
			㉒	5b-7312	花卉博古図
⑧	程峯書画 (白文長方印)	1.3×0.9	㉒	5b-7312	花卉博古図
			㉓	5b-6192	梅花高士図
⑨	古希 (朱文橢円印)	2.6×1.4	⑦	4a-0124	猗香亭図
			⑧	5b-8712	桃実図

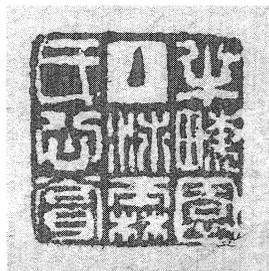
【表3】重複使用印章一覧表

岑」朱文方印【図版8】、②「花卉博古図」と③「梅花高士図」の④「程峯書画」白文長方印【図版9】、⑦「猗香亭図」と⑧「桃実図」の⑨「古希」朱文橢円印【図版10】である。しかし、このほかにも種類が異なり、かつ一度しか使用例のない複数の「遠岑」印などが確認でき、さらに先にみた制作年代と照らし合わせても、②「遠岑」朱文方印が六六歳と七四歳の作品、④「程峯私印」白文方印と⑤「遠岑」朱文方印の組み合わせが七一歳と八三歳の作品、⑦「程峯」白文方印が古希の時期と七九歳の作品でそれぞれ使用されているなど、使用年齢による規則性を導き出すには至らず、使用印章による制作時期の判断は今

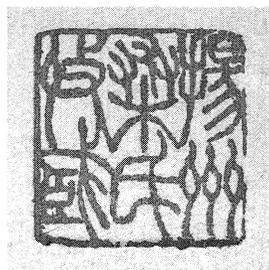
後さらにサンプルを増やさないと限り難しい。

また別人の鑑蔵印として、⑩「溪山霽雪図」と⑪「夏景山水図」にはいずれも「半晦園主沐霖氏心賞」白文方印【図版11】と「揚州桑氏収蔵」朱文方印【図版12】が鈴せられており、同一人物の鑑賞と収蔵を経たことが知られる<sup>8)</sup>。

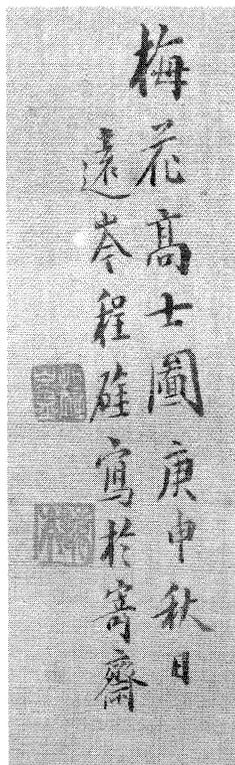
以上、館蔵資料中において使用頻度がやや高い印章を整理してみた。これらの印章は、今後程遠岑作品を特定する上で重要な指標となりえるであろう。



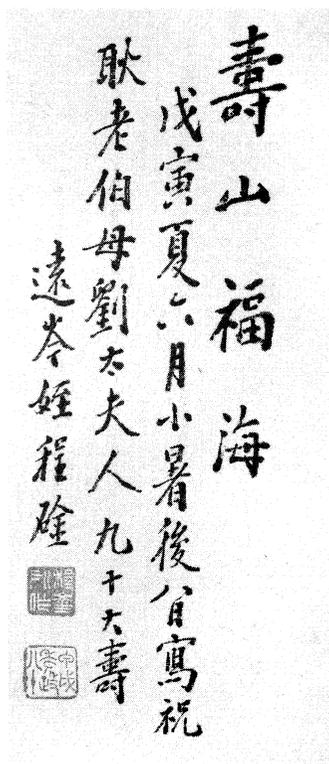
【図版11】  
「半晦園主沐霖氏心賞」白文方印



【図版12】「揚州桑氏収蔵」朱文方印



【図版13】②「梅花高士図」文字



【図版14】⑬「寿山福海図」文字

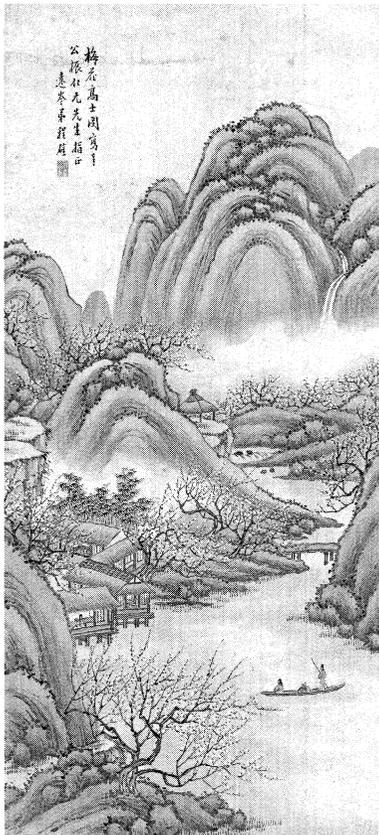
### 三、文字情報について

次に、館蔵資料上にみられる文字情報を考察する。まず作者の自署をみる限り、そのほとんどが「遠岑程遠」というものである。ほかに「遠岑弟程遠」あるいは「程遠」などが散見されるが、制作年代に関わらず字＋氏名あるいはそのいずれか一方のみを記す点で全て共通している。また、干支・年月・制作年齢が記されているものは既述の通りであるが、記されていない作品もままある。制作場所に関する情報は、②「梅花高士図」と⑤「雲峰飛瀑図」の「寄齋」、⑨「溪山訪友図」と⑫「山水図斗方」の「芬陀利室」、⑬「曉風残月図」の「片石齋」が確認できるが、具体的にどこを指すのかは未詳である。さらに為書きからは一七の字もしくは号によるとおぼしき贈呈先が確認できるが【表4参照】、二人を除いて人物は特定できなかつた。この点に関しては改めて考察する。

以上いずれの文字情報も、その書風は総じて線がやや細く小粒な楷書あるいは行書で書かれており、その文字には一貫した特徴があり、たとえば六六歳の作である②「梅花高士図」【図版13】の文字と八四歳の作である⑬「寿山福海図」【図版14】の文字を比較してみても際立った変化はなく、制作年代あるいは年齢による明らかな書風の違いはみとれない。私見によれば、本稿で取り上げた作品上の文字は、すべて同一人物の筆跡であると考え



【図版15】②「梅花高士図」



【図版16】③「梅花高士図」

作品番号	資料番号	タイトル	贈呈先
①	5b-6475	携琴訪友図	伯咸・伯閑
⑦	4a-0124	猗香亭図	
③	t-0824-1	山水図斗方	暁梧
②4	5b-7635	墨梅図	
④	5b-8711	梅花書屋図	薇閣・猿盒
⑧	5b-8712	桃実図	
⑥	5b-6317	墨梅図	子漁
⑨	5b-6439	溪山訪友図	梅卿
⑩	5b-4743	溪山霽雪図	潤正
⑪	3F-0131-2	山水図扇面	翰葵
⑫	3F-0132-1	山水図扇面	純祖
⑬	5h-0167	採芝図	蕉麓
⑯	5a-0113	桃実図	雲白
⑰	5b-4369	孤山高士図	
⑱	4a-1611	寿山福海図	耿老伯母劉太夫人
⑳	5b-6548	夏景山水図	翰屏
㉒	5b-7312	花卉博古図	
㉓	5b-6192	梅花高士図	公振
㉖	t-0197-1	山水図斗方	槐蔭軒主人
㉗	5b-6206	寒林雪霽図	平齋
㉘	5b-7632	山水図	介眉
㉙	5b-8709	山水図	学齋

【表4】贈呈先一覧表

られ、先にみた用印の事例と照らし合わせれば、別人による作が混入している可能性は低いと思われる。

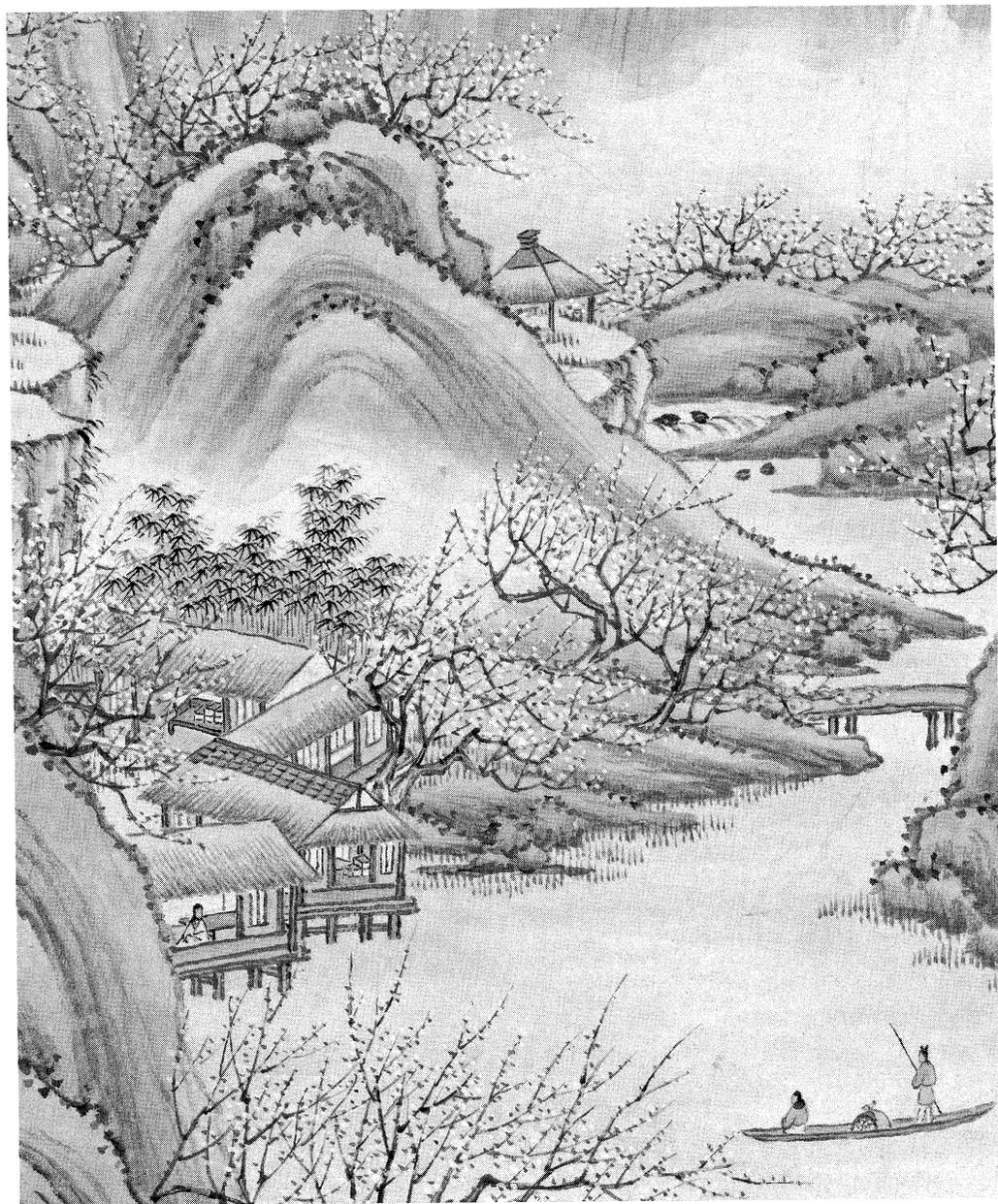
#### 四、作品の特徴について

館蔵の程遠岑作品には、桃・墨梅・器物といった画題が少量含まれてはいるが、圧倒的多数は山水作品であり、「専工山水」の評判を裏付けているようである。そこでまず山水作品を対象に、先に考察した制作年齢・印章等の情報を参照しつつ、程遠岑作品の代表的な作風と特徴を見てゆきたい。

まずは、②「梅花高士図」【図版15】と③「梅花高士図」【図版16】の二点の「梅花高士図」を中心に取り上げる。この二点は題名



【図版17】②「梅花高士図」部分



【图版18】⑳「梅花高士图」部分



【図版21】⑱「寿山福海図」

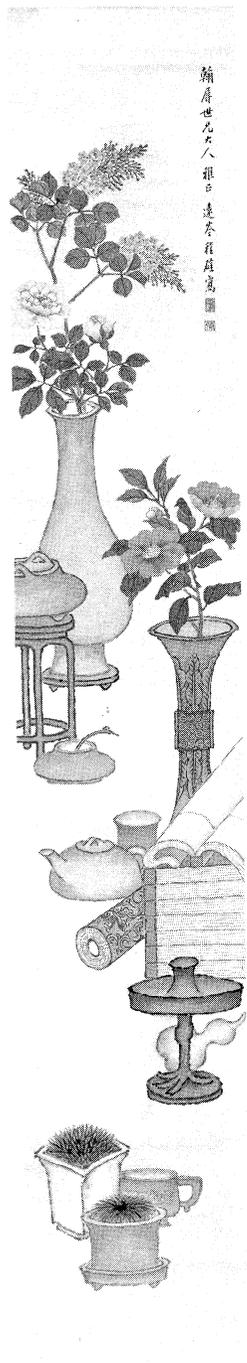


【図版20】⑲「曉風殘月図」

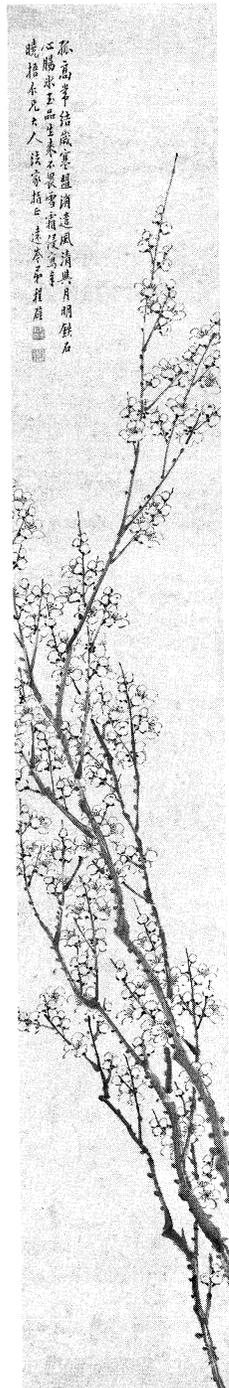
が同じことから構成や描法を比較しやすいであろうし、前者は館蔵資料中では初期の六六歳作であること、⑲「曉風残月図」と⑩「山水図扇面」および⑫「山水図扇面」と共通する①・②の印章が鈴せられていること、後者は制作年代こそ不明であるが、⑳「花卉博古図」と共通する③の印章が鈴せられており、同作はさらに七七歳作の⑭「溪山論古図」と④の印章を共有しており、いずれも他作品へと繋がる手があるためである。

両作品はともに設色の山水図である。前者は絹本、後者は紙本であるため、作品全体から感じられる風合に多少の違いがあるものの、いずれも複数の山の稜線を重ね合わせてゆくことで奥行きを表現するとともに、大小の峰や岩場を複雑に組み合わせながら稜線と後ろの山肌とに色彩の変化をつけ、ところどころに煙霧をはさんで遠近感を演出している。また、稜線の輪郭を描く渴筆気味の線や山肌を描くの用いられている皴の特徴も類似している。点苔は前者が草状の細長く短い線であるのに対し、後者は筆先を使った点状であるという違いはあるが、描き入れる場所や密度などには共通点が見られる。次に両作品にはともに梅と竹が描かれているが、梅の幹の形状や筆先で点を打つような花の描き方は同じである。竹はより特徴的で、細く速度のある線と色彩の濃淡を用いて竹林を表現している【図版17】【図版18】。さらに、山腹に張り出した高台に配される亭など建物の描き様や、室内や舟上に配される簡略に表現された人物などの景物にも、パターン化された型がうかがえる。

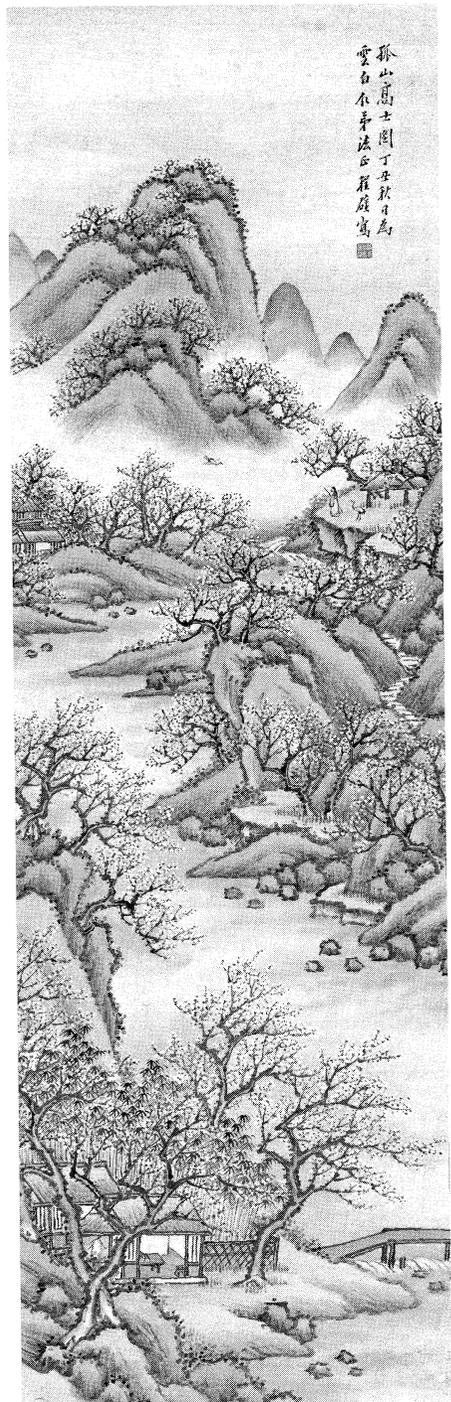
以上を踏まえ、八三歳の作である⑰「孤山高士図」【図版19】と対比してみる。山水の配置に違いはあるが、描法や景物の型の組み合わせは六六歳の作品である②「梅花高士図」と類似しており、画



【图版24】㉔「花卉博古图」



【图版23】㉔「墨梅图」

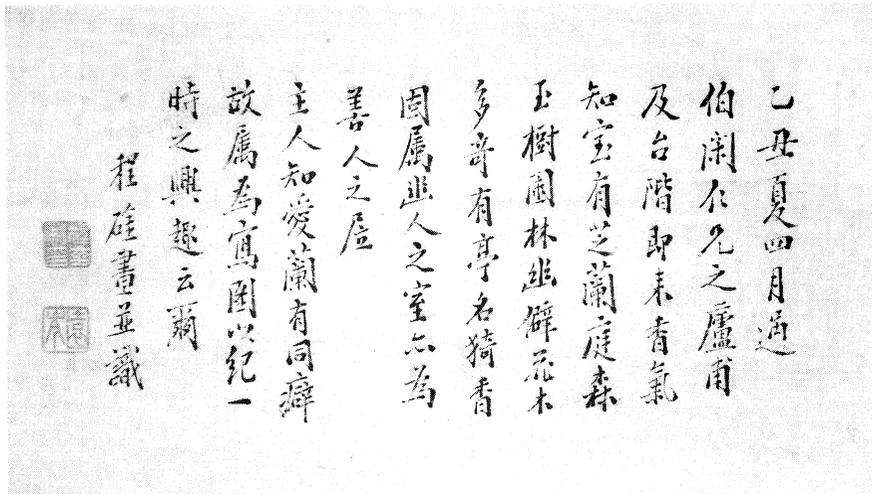


【图版19】①「孤山高士图」

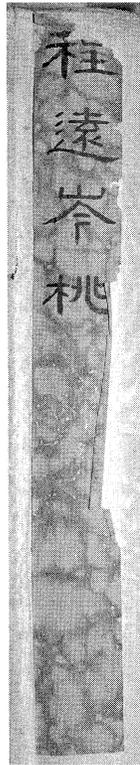




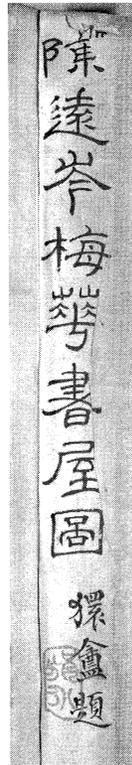
【图版25】⑦「猗香亭图」



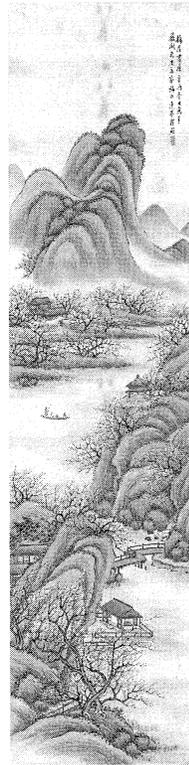
【图版26】⑦「猗香亭图」識語



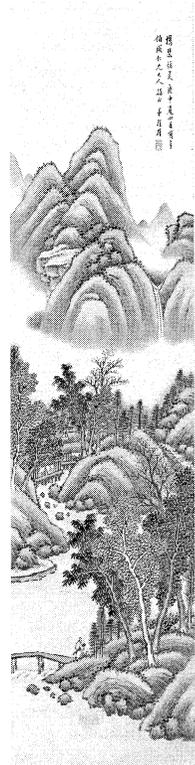
【図版30】⑧「桃美図」題箋



【図版29】④「梅花書屋図」題箋



【図版28】④「梅花書屋図」



【図版27】①「携琴訪友図」

伯閑仁兄之盧甫  
及台階即來香氣  
知室有芝蘭庭森  
玉樹園林幽僻花木  
多奇有亭名猗香  
固屬幽人之室亦為  
善人之居  
主人知愛蘭有同癖  
故屬為写図以紀一  
時之興趣云爾  
程硯画並識

とある。ここに「伯閑」という宛先と「猗香」という亭名が出ているが、「伯閑」とは揚州で活躍した実業家の楊鴻慶であり、「猗香」とは、その住居であった「楊氏小築」の一角にあった亭の名称である。伝<sup>10</sup>によれば、楊鴻慶（一八八二～一九五六）は丹徒の人で、字を伯咸といい、果盒・白閑・卜咸・猗香亭主と号した<sup>11</sup>。十代で揚州に移住し、大塩商のもとで金融を担当して財を成し、揚州銭業会会長・揚州商会会長を歴任するなどした揚州商業界の重鎮であった。また詩文書画を愛好し、歴代名家の作品などを広く収集していた。その住居である「楊氏小築」の庭園には、池や巨石、それに各種の木々を配し、庭園内の亭に置かれた蘭の盆栽の香氣が園外



猿盒大人法家教正

と、「猿盒」という為書きが見えるとともに、「梅花書屋図」の題簽と同じ手による隸書の、

程遠岑桃

という題簽【図版30】が付されており、これも卞絳昌に贈られ、收藏された作品とみなして問題ないものである。

## 結語

以上非常に雑駁であるが、観峰館收藏の程遠岑作品について一通りの考察を加えた。国内外で程遠岑作品を所蔵する機関や個人をつきとめるに至らなかったため、館蔵資料以外のデータとともに総合的に考察できなかったことが悔やまれるが、本稿をきっかけに程遠岑に関する内外の情報が集まり、また各方面の指正・指導を得ることができれば幸甚である。

### 〔注〕

- (1) ⑨「溪山訪友図」、⑦「猗香亭図」(「文人たちの憧憬―中国教養人の理想世界―」平成二二年)、⑳「梅花高士図」(「民国時代の書画」平成二四年)、⑦「猗香亭図」(「文人嗜好―中国知識人のライフスタイル―」平成二五年) 以上観峰館企画展、
- ㉔「墨梅図」(「春と吉祥」平成二四年 八幡市立松花堂美術館)。
- (2) 近年、中国のネットオークション上に出品されている例が見られるが、出品点数は多くはない。
- (3) 『揚州史志』二〇〇七年第一期 揚州市人民政府
- (4) 顧一平注(3)は陳含光の「程遠岑先生小伝」より「君少善画、問業于僧蓮溪」を引くが、原文は未確認。
- (5) 董玉書「蕪城懷旧録」(「揚州地方文献叢刊」江蘇古籍出版社二〇〇一年)。

- (6) 例えば、賀万里「城市的衰微与画家的去留―後八怪時代の揚州画壇」(『芸術百家』二〇一一年第四期)は、揚州における蓮溪と程遠岑の關係に触れるが、ここでもこの説を繼承している。
- (7) 顧一平注(3)は、民国二十四年(一九三五)作とされる揚州の九老人を詠み込んだ「九老紀年歌」の「座中何人年最老、伊川先生画独好、去年自号八十翁、下筆從來不草草」を引く。ここでは程遠岑を北宋の程頤(号伊川)になぞらえつつ、民国二十四年の前年に八〇歳であったとしてのことから、やはり生年に合致する。
- (8) 題簽にもそれぞれ「程遠岑山水屏条冬」と「程遠岑山水屏条夏」と記されており、対で収蔵されていたことが窺える。あるいはもともと春夏秋冬の四幅対であったのかも知れない。
- (9) 同時代の揚州の画家である顧伯遠(一八九二―一九六九)が片石齋老人と号しているが、關係は未詳。
- (10) 以下、楊鴻慶の伝等に関しては、ウェブ版『揚州晚報』二〇一〇年一月一六日の「猗香亭主和楊氏小築」の記事によった。
- (11) 作品の識語には「伯閑」とあるが、状況から見ると楊鴻慶に宛てたものであることは間違いなく、「伯咸」と「白閑」を混同したか、あるいは別に「伯閑」と号していたかいずれかであろう。
- (12) ただし、作中の人物が伝統的漢人の風俗で描かれているなどデフォルメもある。
- (13) 姓が「陳」と誤って記されているが、理由は不明。
- (14) 以下、卞絳昌の伝等に関しては、ウェブ版『揚州晚報』二〇一〇年七月一七日の「揚州隸書名家卞絳昌」の記事によった。
- (15) 注(10)記事参照。